

## 趣旨説明

宮浦 富保

龍谷大学瀬田キャンパスは、琵琶湖の南岸に位置する瀬田丘陵のほぼ中央にあります。瀬田丘陵は、かつて里山として周辺の住民に利用されていた場所でした。地元の人びとはここを「瀬田山」と呼んでいました。1947年に米軍が撮影した瀬田山付近の空中写真を見ると、瀬田山は広大な面積を占めていました。その後瀬田ゴルフコースが開設され、瀬田山は大きく面積を失いました。さらに、県立医科大学、県立図書館・美術館、県立高校、大津市公設市場、龍谷大学など、次々に開発が進められ、瀬田山の面積はかなり少なくなってしまいました。

そんな中1994年に、龍谷大学は瀬田学舎に隣接する約38haの森林地域を購入しました。我々はこの森を「龍谷の森」と呼んでいます。龍谷大学がこの森林地域を購入したのは、瀬田学舎を拡張し、グラウンド等の設備を充実させるのが目的でしたが、環境アセスメントでオオタカの営巣が確認され、「龍谷の森」の開発計画は見直されることになりました。

その後2003年に、理工学部環境ソリューション工学科が開設されました。この学科では、多くの実習科目で「龍谷の森」を利用していますし、卒業研究など多くの研究がこの森で行われています。実習林（演習林）を所有している大学は全国にたくさんありますが、「龍谷の森」くらいのまとまった面積の森林をキャンパスに隣接して所有しているのは、大変珍しいことです。

2004年4月からは、里山学・地域共生学オープン・リサーチ・センター（里山ORC）が、「龍谷の森」を拠点として里山の調査研究を開始しました。里山ORCは、生物多様性や環境などを研究する自然科学研究班と、地域の歴史や文化などを研究する社会・人文科学研究班の2つからなっています。龍谷大学、金沢大学、京都女子大学、九州大学などの多くの大学、研究機関、行政といった組織からたくさんの方々、里山ORCの研究スタッフとして参加しています。

「龍谷の森」の動植物や菌類を調べたところ、意外に多様性の高い森であることが明

らかになってきました。瀬田山で生活していた動物たちにとって、まとまった面積のある「龍谷の森」は貴重な場所になっています。また、かつてはどこでも見られたような植物も開発によって失われつつあり、「龍谷の森」はそのような植物が育成できる残り少ない場所となっています。

かつて里山として利用されていた頃、瀬田山の薪を誰がどのように利用していたのか、瀬田山から流れ出す水はどのように利用されていたのか、肥料にする木の葉をどのように掻き集めていたのか。このような里山利用の歴史を振り返り、その価値を再認識することは、里山ORCの最大の研究課題であり、今回のシンポジウムの成果に大いに期待しています。

現在は、化学肥料や農薬が簡単に入手できるし、ガスや石油などの化石燃料を使えば、便利で快適な生活を送ることができます。苦労して、薪や木の葉を里山から採取してくる必要はありません。こうして多くの里山は利用されなくなりました。

生活に直接役に立たない森林に存在意義はないのでしょうか。そのような疑問を多くの方が持つようになってきました。経済的に役立つだけの森林でなく、景観としての森林、散策を楽しむことのできる森林、子どもたちが遊び場として利用できる森林、いろいろな動植物の存在できる森林、そのような多様な価値を持つ森林に意義を認める社会になってきました。現在人口が急増している滋賀県南部地域にあって、瀬田山の価値はとて大きいと思います。特にその中でも「龍谷の森」の価値について、改めて考える必要があるでしょう。大学が所有する森林は単なる私的財産ではなく、公共的な価値も併せ持っているはずで、「龍谷の森」は、地域共生の核として機能できるのではないかと考えます。

## 瀬田・田上鳥瞰絵図について

蔭山 歩

私が「鳥瞰絵図」を描くことになったのは、大津市仰木地域との出会いがきっかけでした。私は、成安造形大学住環境デザインクラスに在籍し、大学の西側にある仰木地域に関心を持ち、地域の方への聞き取りやフィールドワークをしていました。仰木に関わって2年が過ぎた頃、仰木学区地域活性化委員会から成安造形大学へ依頼があり、国土交通省の「地域資源活用構想策定等支援調査 地域の魅力づくり支援事業」という助成を受け、仰木では、「地域資源を活用した『心のふるさと仰木の里山マップ』作成&発信プロジェクト」がはじまりました。当時はすでに大学を卒業していましたが、そのプロジェクトのコーディネーターと絵図制作を担当することになり、学生たちと一緒に地域の中にはいって絵地図をつくるということになりました。約1~2ヶ月間、地域の方たちへの聞き取りやフィールドワークを行い、長い年月にわたり四季を通して繰り返し自然と対峙してきた里山の営みや祭礼行事が、地域の方の記憶や心の支えとなってきたこと、また、その反面、仰木の良さや魅力を後世に受け継いでいくことの必要性を感じていることなどがわかってきました。聞き取りやフィールドワークをふまえた上で、「鳥瞰絵図」という技法で仰木絵図を制作することにしました。

「鳥瞰絵図」は鳥目絵とも呼ばれ、鳥が空から地上を見下ろしたように描いた風景図または地図のことで、地形や地物を一目瞭然に理解することができます。狩野永徳の「洛中洛外図屏風」や葛飾北斎の「東海道名所一覽」など鳥瞰図法の表現には広がりがありますが、その中でも、技術や芸術性を高めた吉田初三郎（1884~1955年）の鳥瞰絵図は、鳥の目と広角の魚眼レンズをミックスした多視点魚眼法によるもので、地域をダイナミックに立体的にとらえ、また重要な場所は存在感を持たせるように徹底的に細部まで描きこみ、空間をデフォルメして表現するというユニークで魅力的な地図として、大正から昭和初期におこった観光ブームにおいて人気が高まり、日本中の名所絵図約1600点が描かれています。

この絵図を採用したポイントは、空間のとらえ方です。自分達の住むこの場所が日本の中のどこにあり、どういう環境に立地しているのかという広い視野から自分の住む場所へ目を向けることができることです。ただ地理情報ばかりでなく、描かれる地域の文化や歴史をも含めて描くことができます。それにより、場所本来の特性（地力）を感じることができるものです。聞き取りで感じた地域を再認識・再発見するきっかけとなる地図にしたいと考えました。

仰木を描き、あることに気づかされました。地域の方々に絵図をお披露目をした時、みなさんが口々に地域の物語や歴史や、仰木はこうあって欲しい、みんなでこういうふうに暮らして行きたいという話をされました。地域について思いを巡らせ、昔のことやこれからのことに思いを馳せる時間をみんなで持つことがとても尊いものを感じられました。その時間そのものが、地域の活性化につながる大事な部分ではないかと感じ、絵図の持つ力をも実感したのです。

今回制作した「瀬田・田上鳥瞰絵図」は、仰木鳥瞰絵図と同じように、2年をかけて出会った地域の方々や龍谷大学の方々の言葉や顔を思い浮かべながら、教えていただいた地域の風土や歴史などの情報を受けて描かせていただきました。瀬田山には瀬田と田上地域を結ぶたくさんの記憶や歴史があり、時代の波にさらされながらそれぞれの地域が変化してきました。この2007年を切り取った絵図を見ながら、地域について思いを巡らせ過去や未来に心を馳せて、いろんなお話しが語られることをとても楽しみにしています。ご感想を聞かせていただけたら幸いです。

## 古文書の中の村山

田中三郎

山の歴史は、山と関わった人のできごと、山と共生してきた人々の足跡、角度を変えて村人に対して果たした山の役割が山の歴史と言えるのではないのでしょうか。南大萱区には近世の庄屋文書が保存継承されています。また膳所藩の郡奉行所の執務日記「郡方日記」には、郷村のできごとが百五十年以上記録されています。その中の山の事例を紹介します。

- 1. 灌漑用水源** 貞享元年（1684）九月二十一日、膳所藩は九郡百四十七か村六万石が安堵されています。うち旧粟太郡はおよそ半数の七十二か村で、大萱村1071石5斗余り、大江村920石7斗で、勢多山を囲む他の村の約二倍の村高ですが、地形的に畑が多く、後に田地へ転換するにあたり山裾に溜池を築いています。例えば石拾池は元文二年（1737）八月（陰暦で現在の九月頃）に、郷人足延816人をかけ五日間で築堤され、丸尾池（現南大萱霊園）は天保九年（1836）に立樋（たちび）埋樋の支給を請願し築堤しています。
- 2. 牛馬の飼料源** 延宝四年（1676）七月、大萱の村山に生まれた大萱新田（現月の輪地区）へ、「一牛馬飼候下草之儀本郷並二山江入可申候事」との藩主の安堵状があり、本郷並二（もとごうなみに）とは「大萱村並に」を意味し、すでに大萱村に飼料の草刈が許可されていたことを示しています。

一般的な農村史にある刈敷（かりしき。地方により、かしき、かっしき、ほどろ、等といい、刈草のことで田畑に肥料として鋤き込んだもの。現代の緑肥）の記録はありません。その理由は琵琶湖の藻の肥厚効果が高く、泥藻掻きがそれに代わっており小物成（藻運上、雑税のひとつ）が賦課されていました。
- 3. 燃料源** 藩領の山は勢多（瀬田）山に限らず御林山と呼ばれ、樹木の伐採には罰則を課し、枯れ木の伐採、落ち葉集め、茸の採取に至るまで許可が必要でした。

4. **副産物** 松茸や雑茸が多く自生し、天保十四年（1843）閏九月二十一日に時の藩主下総守（兵部大輔）康禎（やすつぐ）が松茸狩りに入山しています。また嘉永年間には大萱・大江・橋本・牧・石居の各村が、松茸の採取権を得て耕地開拓の資金に振りあてており、まさしく松茸の宝庫であった往時をしのぶことができます。また弘化三年（1846）に大萱村が、雑茸を困窮者の年貢に充当する嘆願を起こし、同年大江村が、松茸と雑茸を一ツ松池普請の費用にあてる嘆願を起こしています。
5. **官山（御林山）の払い下げ** 明治二年（1869）暮、膳所藩は藩士を帰農させる帰田法を施行しました。藩の解体にともない藩士の生活保障・救済手段でした。このとき御林山を分割入手した武家は、目先の利に走り松を伐採して現金化しました。明治四年（1871）七月に廃藩置県、この年大萱村の官有地（旧御林山）は、坪数六万六千三百九、目通り（回り）一尺以上の松二千九百二十一本でした。この山林は灌漑用水の源であり、これが丸裸になることを危惧した村の三役は、県令（知事）に対し執拗とも言えるほど繰り返して嘆願を起こしています。この方策が奏功し、以後第二次大戦の後年にいたるまで、食糧難の時代の収穫を支えて来ました。

本日の発表は、これらのなかから山林伐採の規制・落ち葉集め・村山への払い下げに関するものです。

## 瀬田山をめぐる暮らしの思い出

---

松田庄司

1. 南大萱 村の変遷  
人口、田畑、宅地、山地の移り変わり
  
2. 戦前 農家の生活の模様
  - (1) 農家の住まい
  - (2) 衣食は自給自足
  - (3) 炊事・風呂・暖房用燃料
  
3. 山の仕事は一家総出
  - (1) 木の葉かき
  - (2) 下草刈りと灌木の薪
  - (3) 割木づくりと保管
  
4. 山での楽しみ
  - (1) 家族、一族総出で年一回松茸狩り
  - (2) 保存食となる山の幸
  
5. むすび

## 里山とくらしー上田上のヤマダから

古市秀樹

田上（たなかみ）は東、北を田上山、金勝山に西を瀬田山に囲まれ、信楽を水源とする大戸川が北東から南の瀬田川へ流れ、その地勢から独自の文化を育んだ。

古くは日本書紀に谷上（たにのかみ）と表され万葉集、正倉院文書の中や、方丈記、西鶴の武家義理物語にも田上の名が見られ、田上山は藤原京や石山寺造営の用材供給地としてされ、明治以前までは多くの花崗岩が露出していた。明治以降、本格的な砂防事業が始まり、1000年を経てようやく緑が戻りつつある。この田上の地で村人は里山に入り、ともに暮らしてきた時代がつい、この前までであった。

昭和30年代半ばまでは、生活の中に里山が入っていた。家にはおくどさん、五右衛門風呂があり、冬仕事として、男は「山行き（やまゆき）」と称し、雑木を伐採し割り木にし、女は「柴し（しばし）」「木の葉掻き（こなはかき）」と称して、山に入った。里からも田上手拭いを被り、田上木綿の三巾前垂れをした女性が木の葉掻きをするのが垣間見えた。

春、綾の花で里山が覆われるようになると里と山の間では女、子供たちは山菜取りに夢中になった。灰であく抜きされた蕨は田植え準備で疲れた大人のおかずとなった。

稲刈りも終わり頃になり、村人は松茸狩りに出る。松茸カンゴ入れ誇らしげに里に持ち帰った。良い松茸は仲買人に売られ、貴重な現金収入になったが、虫食いや時期の過ぎたのは家でのおかずとなり、毎日となるとさすがにうんざりした。

子供たちは大人以上に里山によく入った。禿山となっているところで、箆をもって山すべり、風化した岩を谷底に落とす岩落とし、水晶取り、宿り木の実を噛み、岩なしを食べ、つつじの花の蜜を吸い空腹を満たした。遊びだけでなく、和紙の原料となる楮（こうぞ）の皮を剥き乾かし買ってもらう「楮取り」はいい小遣いとなった。

このような里山とのくらしも、燃料が昭和40年代に入りプロパンガスになり、割り木、柴が不要となって里山に入らなくなってから、山が荒れ、松枯れも進み、かつては見通しもよかった所も木々が繁茂し、子供たちも山で遊ぶことも無くなり、太い楮の木もあちこちで見られるようになった。

今、私は上田上、牧のヤマダの網掛けという所で、大小7枚の棚田の田んぼを養い、稲作をしています。網掛け谷、高崎谷、口谷、三本の谷から水を引き、1月に田起こし、春の初めには畝たて、彼岸の頃には谷に入った落ち葉を掻き田にいれ、谷水を引き代掻き田植えの準備をする。

谷水からは、椿や山桜の花が、また、秋に落ちた団栗も一緒に運ばれ田んぼに入る。5月の連休に田植えをし、毎朝の水見（みずみ・田んぼに入れる水の調整）にも慣れた頃、植えたばかりの青苗を鹿に食べられ落胆する。梅雨になるとモリアオガエルが産卵した柿の木から田んぼにおたまじゃくしが落ち、夏を迎える。日当たりの悪いヤマダにもお盆前には、穂が出て夏休みが終わる頃色づいてくる。この時期を待っていたのは、私だけではなく、猪も夜に電気柵をもろともせず侵入してくる。

9月、収穫の日を迎え軽い稲束にも喜びがある。11月には木々の葉が田んぼに落ちるようになると、山行きの時期となり、周囲の繁った木々を切り割り木をし、また1月の田起こしを迎える。この繰り返し。それがくらしです。

## 田上盆地の水田農業と里山とのつながり

柴原 藤善

### 1. 里山「瀬田丘陵」の特徴

農業は、安全・安心な食料の生産に加え、その営みを通して、美しく豊かな自然環境を守り、個性豊かな地域文化を育み、緑と潤い満ちた生活の場を提供するなど多面的な役割を果たしている。近畿1400万人の水資源である琵琶湖を有する滋賀県でも、古くから水田農業が発達し、里山（農用林）も燃料・肥料等の供給源として利用され、里地・里山が一体的に保全されてきたが、化石燃料・化学肥料の普及、高度経済成長以降の農地・里山の開発、農家の減少等により、里山の価値が著しく低下し、現在ではあまり手入れされずに放置されつつある。

瀬田丘陵も同様の状況にあり、北西側（瀬田地域）では、かつて琵琶湖辺の平坦地から瀬田丘陵の傾斜地に向かって水田とため池が開拓・造成され、里山は水源・薪山として利用されていたが、近年急速に宅地開発が進んでいる。瀬田丘陵の地質は古琵琶湖層群に属し、粘土・シルトを多く含み、水田の水持ちやため池の貯水量の確保に少なからず寄与しているが、南大萱や月輪（新田）の集落にみられる「水入れ制度」による節水管理や「月輪共同炊事」の奉仕活動には、水不足な傾斜地の水田農業を支えるために集落で協力し合った先人の智恵と心意気を感じられる。

### 2. 田上盆地の水田農業

一方、瀬田丘陵の南東側には、「田上盆地」が田上山地との間に広がり、信楽・田上山地を水源とする大戸川と支流が谷底盆地の水田を潤し、瀬田川に合流している。しかし、田上山地の地質は花崗岩で風化しやすく、奈良時代以降の乱伐によって「はげ山」となり、幾度となく大戸川が氾濫し、今からちょうど300年前（1708年）の大洪水では、上田上地域の芝原・中野・堂の集落全体が流され、芝原・堂は現在の瀬田丘陵のふもとに移転した。両集落には、氾濫の後に大戸川の付け替えや農地整備のために山土を削り取った場所が小字名「土場（どば）」として残っている。

田上山の治山・砂防工事が明治時代から国直轄事業として行われ、また瀬田丘陵の南東斜面の山でも砂防用の堰堤や砂止めの工事が行われた。農家は（我が家も）、「水稻－麦・菜種」の二毛作体系を中心に作物を栽培し、役牛を飼養して農業を営むとともに、里山に植樹をし、下柴を刈り、落葉を集めるなどの手入れを行い、用材・燃料・肥料の供給源として里山を活用した。

このように、花崗岩由来の砂質土壌（肥沃度が中程度の乾田）、良質で水量も安定した大戸川用水、里山の利用、温暖な瀬戸内式気候と盆地特有の気象等の好条件に加え、農家の米品質改善へのたゆまぬ努力によって水田農業が発展し、「田上米」は明治時代の後期に良質米の産地として名声を博するようになった。また、「田上手拭」、「雁皮紙」、「菜の花漬」にみられるように、田上盆地の水田農業や里山の資源を活かした地域文化・芸術が育まれ、今日に受け継がれている。

### 3. 環境こだわり農業の取組状況

滋賀県では、2003年に「環境こだわり農業推進条例」を制定して、全国に先駆けて環境農業直接支払制度を創設し、環境こだわり農業（化学肥料・化学合成農薬の使用量を慣行の5割以下に削減するとともに、濁水流出防止など琵琶湖等の環境への負荷を削減）に取り組む農家を経済的に助成してきた。取組面積は毎年倍増し、2007年には10,000ha余りが見込まれている。

上田上地域でも、大区画に圃場整備された集落営農を中心に、2007年に水稻で約43ha（栽培面積の25%）取り組まれている。また、化学合成農薬の使用量を概ね半減し、浅水代かきや側条施肥によって濁水・肥料成分を流出させない技術を実践している農家も多く、既成田や棚田では丁寧な畦草刈りによって季節の草花が咲き誇り、用水路の土手にはゲンジボタル、水田の田面水には甲殻類などが確認されており、様々な取り組みが地域の生態系や生物多様性の保全に貢献している。

### 4. 今後の里山保全のあり方

以上のように、瀬田丘陵を囲む一帯は、宅地等の開発が進む中でも、湖・河川・水田・ため池の「水辺」と「里山」が狭い地域に回廊のようにつながっており、恵まれた自然環境にある。また、北側と南側とでは、土壌・水利条件や開発の程度が異なるが、

人や文化の交流が深く、相互補完的な役割を果たしており、里山保全のあり方を考える貴重なモデルとなろう。さらに、地球温暖化の進展により、「環境」問題は「エネルギー」と「食料」と密接な関係を持つようになり、里山保全においても、3つの問題を総合的に考え、地域資源として新たな価値を生み出す必要があろう。

このため、里山保全の活動には、多様な主体や幅広い年齢層が参画し、都市住民や消費者と連携する必要がある。里山・里地・里海をつなぐ流域管理の中で環境教育や食農教育を広め、安全・安心で環境と調和した農業（食と農と環境）への理解と支援を得ることが今後益々重要となろう。

## 瀬田丘陵「龍谷の森」の生物多様性

横田 岳人

瀬田丘陵の一角に龍谷大学瀬田キャンパスが造成されたが、その周囲の森林は「龍谷の森」と通称され、龍谷大学の理工学部を中心とした研究教育活動の場として用いられている。「龍谷の森」は長らく里山として利用された森林であったが、龍谷大学の購入当時は里山としての利用を終え、放置された状態にあった。アカマツを中心とした森林が広がり、当時のアセスメントの結果では、植物は維管束植物374種が記録されている。理工学部環境ソリューション工学科では2006-07年に標本採取を通じて「龍谷の森」の植物リスト作成を行っているが、現在までに標本採集された維管束植物は229種のみで、龍谷大学が購入した時点より種数は減少している。調査者の技術の差もあり単純比較は出来ないが、この種数をもとに生物多様性を評価すれば、「龍谷の森」の生物多様性は減少していることになる。

一般に里山の生物多様性は高いといわれている。これは里山が遷移途上の植物群落を作り出す植生であること、里山という環境の中に動植物の生育生息基盤が多様な状態で存在していることの2点が、生物種の多様な状態を生み出し、生物多様性の高さを支えている。瀬田丘陵付近の植生は、台風や人為等の大規模な攪乱が生じない限り、伐開後、明るい草原的環境から疎林を経て落葉広葉樹林、常緑広葉樹林へ推移していく。その過程で、その場所に生育する植物や生息する動物は、周囲の環境条件に応じて変化する。里山として土地利用は、植生の面からみれば人為的な攪乱が継続的に提供される利用形態であり、遷移途上の各種植生が人為的なコントロール下で共存できる条件を提供する。つまり里山では、異なる2つ以上の生物群集（遷移前の植生と遷移後の植生）が同所的にモザイク状に成立することで、動植物にとっての多様な生息生育基盤が確保され、多種多様な生物群集が実現されている。里山の生物多様性の「豊かさ」は、遷移途上の群落が移りゆく際の移行期の「豊かさ」ということができる。

「龍谷の森」では、明るいアカマツ林だった時代から20年程度の時を経て落葉広葉樹のコナラ林へと遷移し、徐々に常緑広葉樹が増加して林内が暗くなってきた。人為的な

攪乱が無くなり遷移が進むに連れて暗い林内の立地が増加し明るい立地が減少した結果、明るい立地を好む植物の生活環境が失われ、これら植物の多様性の低下に繋がっている。つまり、「龍谷の森」の生物多様性の低下は、人為的な攪乱を加えなくなった結果であり、生物群集の移行が進むことで、移行期特有の「豊かさ」が失われることにより引き起こされたものである。

新・生物多様性国家戦略に挙げられた日本の生物多様性の第2の危機（身近な生物の消失）に対処するためには、里地里山への失われつつある人為的な働きかけを取り戻すことが必要とされる。「龍谷の森」に見られる生物多様性を維持し失われつつある動植物を取り戻すためには、里山＝龍谷の森という空間で遷移途上の植物群落を維持し続けることが必要となり、人為的な手入れが不可欠になる。この人為的な手入れには決まった方法はないが、継続的に手を入れることが大切である。里山的生物多様性の本質は、複数の生物群集が共存的に同所的に成立していることであって、どの生物群集が不可欠であるといった要件は特に存在しない。瀬田の温度環境や降水量の要件を考えれば、複数の生物群集の共存環境を整えることはそれほど難しいことではないと思われる。今後の「龍谷の森」の実験的利用を通じて、生物多様性に配慮した里山施業を考えていきたいと考えている。